

コッホにとっての「心理診断」

富山大学 岸本 寛史

Norifumi Kishimoto : Psychodiagnosis for Koch

1 はじめに

本稿は、バウムテストを体系化したコッホ (Karl Koch, 1906-1958) にとって、「心理診断」(Psychodiagnose) がどのようなものを意味していたかを、意味論的分析 (Izutsu (1959)、井筒 (1972, 1992)) の手法によって浮き彫りにしようとするものである。コッホの原著『バウムテスト』(Der Baumtest) 第三版 (Koch, 1957) の副題は「心理診断の補助手段としてのバウム描画研究」(Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel) となっており、コッホがバウム描画を「心理診断」の補助手段と位置づけていたことがわかる。しかしそこで問題とすべきは「心理診断」という言葉にコッホがどういう意味を込めていたか、である。邦訳者たちはこれを「人格診断」と訳している (コッホ (1970)) が、はたしてコッホにとっての「心理診断」とは「人格診断」なのだろうか。さらに、その場合の「診断」とはどのようなものであろうか。あるいは、現代の我が国における心理臨床の世界においては、「診断」という言葉の代わりに「見立て」とか「アセスメント・査定」という言葉が使われることも多いが、コッホにとっての「心理診断」とは、「心理アセスメント・心理査定」に相当するものだろうか、それとも「見立て」なのだろうか。少

なくとも、コッホがわざわざ「心理診断」という言葉を使っていることから考えると、医学的な意味での診断を想定していたのではないことが察せられる。このような問題意識を出発点として、本稿では、コッホが「診断」、特に「心理診断」という言葉にどのような意味を込めていたのかを、意味論的分析の手法を用いて明らかにしてみたい。

2 方法—意味論的分析

意味論的分析とは、言語や時代が異なるテキストにおける概念を、その著者の意図に即して理解するための方法である。井筒は、アラビア語の原典に出てくる善とか悪の道德概念を、われわれの道德観念から評価するのではなく、原典に添って理解するために、意味論的分析という方法を用いた。これは、言葉の意味を正確に把握するために、ある言葉をそれに対応するような自国語に置き換えるのではなく、そのテキストの中でその言葉が使われている文脈を一つ一つ検討して、その言葉がどのような意味を持つかを明らかにしようとするものである。この井筒の方法は、語の意味を、「原典をして語らしめる方法」(牧野、1972) であり、読み手の観念体系に引き戻して理解するのではなく、書き手の意図をそのまま理解するための方法論ともいえる。本稿においても、テキストの

中から「診断」もしくは「心理診断」(原語は Diagnose (診断)、diagnostisch (診断的)、Diagnostiker (診断者) などであり、Diagnose に派生する言葉をすべて含む) という言葉が使われている箇所を取り出し、一つ一つ検討することによって、コッホにとって「心理診断」という言葉がどういう意味をもっていたのかを明らかにしていきたい。

3 基本姿勢

診断について論じる前に、バウムに対するコッホの基本的な姿勢について考えておきたい。次の箇所にはそれがよく現れていると思われる。

心理診断の目的でバウムを一枚、あるいは数枚描く描き手は誰でも、少なくとも、自分の人格が正当に扱われることを期待している。うまく描けなかったり、うっかり描き損なったりという理由で、仲間 [／被験者のこと] を傷つけるようなことがもしあれば、それは恥ずかしいことであるだけでなく、無責任なことでもある。誤った判断を下す危険性は、もちろん、ゼロにはできないが、どんなテストも、絶対的なものとは考えるのではなく、むしろ一つの方法として利用されるならば、危険は減る。(原著124頁)

描き手を傷つけるようなことになれば、それは単に恥ずかしいというだけでなく、無責任である、と強い口調で戒めている。これはバウムに取り組むときには肝に銘じておくべき言葉であろう。次に述べるバウムの分析的理解も全体的理解も、すべてこの「責任」感を出発点としていることを忘れてはならない。それを踏まえうえて、コッホのバウムの理解の仕方を見ていくことにする。その取り掛かりとして、次の部分を見てみよう。

バウム描画は、筆跡のように、全体的、直観的に把握することがやりやすいので、なるほど、印象の定式化は、個々の調査に立ち入らなくともできる。しかし、指標の分析は事実即した

[／冷静な] 観察 (Beobachten) を前提とし、そこで与えられる解釈は、鑑賞 (Schauen) 能力に左右されることになるので、全体的な把握においても尚更鑑賞能力がものをいう。観察は認識に通じ、鑑賞は理解に通じる。もちろん全体とは、厳密には、分析不可能なものとして捉えられるので、印象を言葉にする場合、そのごく一部が [言葉に] 翻訳されるに過ぎない。(原著124頁)

ここでは、バウム描画を把握するに際して、指標の分析に基づく分析的理解と、鑑賞(じっくりと見つめること)に基づく全体的理解とがあることが述べられている。そしてそれを習得するために、二つの方法があるとコッホは言う。一つは、図の表現の読みを学ぶことであり、それは主に指標の確定に基づいて行われる。もう一つは、

先入見を持たずに心にしっかりと刻み付け、「じっくりと見つめ」(anschauen)、批判的な態度を一切捨ててただ眺める (betrachten) のがよい。見つめる (Schauen) ことから、徐々に視覚 (Sehen) が生じ [／見えるようになり]、違いが識別されるようになる。イメージが自ずと分化し始め、客体との距離が縮まってくる。ここで初めて、見つめること (Schauen) が批判的な観察と結びつく。(原著124頁)

ここでは「じっくりと見つめ」ることの必要性が強調されている。見つめるうちに徐々にその本質が見えるようになり、違いが識別されるようになると同時に、客体との距離が縮まると指摘している部分は大切であると思う。バウムを客観的に、つまり、単に冷静に、距離をとって眺めるだけではなく、バウムとの距離を縮め、いわばバウムの中に入り込むような姿勢でバウムを理解していくことの必要性を訴えているように思われるからである。この姿勢は、冒頭の「木の文化史」という節の最後で、ユングの論文をかなり長く引用していることにも窺われるが、これについては神秘的

融即という観点から既に論じた（岸本、2005）ので本稿では省略する。客観的な見方を解剖学的な見方に喩えている箇所もある。

診断をするものにとっては、ある〔診断のための〕体系と並んで、先入観にとらわれない視線を保つのがよく、そのような視線こそ、あまりに広範に及ぶ解剖〔的な細部を分析していくような見方〕よりも、外観の全体が正当に評価される。もっとも、そのような解剖的な見方なしには、学問的な研究は必ずしも先に進まないのであるが。（原著191頁）

コッホは、バウムを理解する際、解剖学にも喩えられるような冷静な客観的な見方の必要性を認識すると同時に、それだけでは不十分で、バウムをじっくりと見つめ、その距離を縮め、いわばバウムの中に入っていきような見方も必要であると意識していた。これらの二つの姿勢は、そのまま診断に対する考え方にも反映されている。このような基本姿勢を踏まえて、コッホが「診断」をどう考えていたかをみていくことにしよう。

4 二種類の診断

コッホの『バウムテスト』第三版（以下、「原著」と記す）の本文中で、最初に「心理診断」という言葉が出てくるのは概論の冒頭部である。

バウム描画を心理診断の補助手段として用いるという考えは、チューリッヒ州、フェグスヴィル・リュッティ在住の職業コンサルタント、エミール・ユッカーに始まる。彼の助言に従って、多くの職業コンサルタントがバウム描画を採用したが、〔解釈の〕方法論に関する調査は長らく試みられなかった。（原著22頁）（〔 〕内は筆者が補った部分）

バウムテストの由来についてはしばしば、「ユッカーが着想し、直感的に行っていたものを、コッホが体系化した」と述べられることが多いが、上

記の引用部分からは、コッホが単にバウムという方法（職業相談において木の絵を用いるという方法）だけを受け継いだのではなく、「心理診断」の補助手段として用いるという姿勢も受け継いでいることがわかる。したがって、コッホにとっての「心理診断」を理解するためには、ユッカーがバウムをどのように捉えていたかが参考になるだろう。原著の中でユッカーについて述べているのは、上記の引用のすぐ後の部分である。

描画は、たいてい、直観的に解釈された。ユッカーが私に個人的に打ち明けてくれたことだが、彼はバウム〔テスト〕に偶然行き当たったのではなく、「文化の歴史、とりわけ、神話の歴史を十分に考察し、長期にわたる研究の末にバウムと出会った」のだという。以下の彼の考えには、テストが生み出されてくる経緯の特徴がよく現れている。「年来、おそらく1928年ごろから、私はこのテストを施行してきたが、ゆっくりといくつかの経験的観察の大体のところを確かめるために、テストそれ自身の評価〔／妥当性や信頼性の検討〕はしなかった〔ohne eigentlich Auswertung〕。むしろ、本質的には、被験者の問題がはっきりしている部分を、純粋に直観に基づいて指摘するという形で、バウムテストを役立ててきた。私は自分の知識と能力の限界をよく知っているので、職業選択の判定〔Berufswahldiagnose〕に際して、一般の人にも、とりわけ被験者自身にも自ずと理解できるような、あるいは少なくともわずかな助けがあれば理解できるような、補助手段を探し出すことで長らく満足してきた。と同時に、人格全体を、その存在の深い層において把握する必要性、もう少し控えめにいえば、せめて漠然と察知する必要性も当然感じている。それで私は、バウムテストを行ってきたのだ」。（原著22頁）

これを読むと、ユッカーが漫然と直観に基づいてバウムテストを行っていたのではないことがわかる。ユッカーはバウムを広く文化的神話的な背

景の中で捉えていた（「文化の歴史、とりわけ神話の歴史を十分に考察し、長期にわたる研究」）し、非常に謙虚で慎重な姿勢（「私は自分の知識と能力の限界をよく知っている」）で取り組んでいた。ここで鍵となるのは「テストそれ自身の評価はしなかった」と述べている部分である。これは、いわゆる人格判断や性格判断としての心理テストの妥当性や信頼性の検討を、敢えてしなかったことを示しているように思われる。「純粹に直観に基づいて」というのは、バウムを要素や項目に分解して捉えるのではなく、描かれたイメージを「まるごと尊重する」という姿勢を示しているのではないだろうか。心理テストに限らず、テストは一般に、「判別する」ことをその目的とする。神経症であるかないか、精神病であるかないか、発達遅延があるかないか、といったことを目的とする判別のためのテストと位置づけるなら、そのための判別指標を抽出して、その特異度と感度、信頼性と妥当性などを検討することが可能である。これらは研究のデザインとしては比較的シンプルなものであり、その実施もそれほど難しいものではないだろう。しかしながら、ユッカーはそれをあえてしなかったのではないだろうか。「通常は・・・診断的補助手段として有用かどうかの判断を下そうと試みるものだが、バウムという主題との出会いは、そういう気も起こさせないものだったらしい」（原著で二番目に「診断」という言葉が出てくる箇所）とコッホも述べている。バウムを単に判別のための道具としてのみ位置づけることにはユッカーはためらいがあり、コッホもそのユッカーの姿勢を受け継いでいるように思われる。三番目は次の箇所である。

描出 [されたバウム] と向き合う時には、直観により近づくしかないが、ロシアの偉大な演出家、スタニスラフスキーの次の言葉は参考になるだろう。・・・「インスピレーションが働いている時には存分に演じることができる。しかし、インスピレーションは、いつも訪れるとは限らない。だからテクニックが必要となる。テ

クニックを十分に習得すれば、インスピレーションが働いているかどうか、観客に気づかれることはない」。診断を行うものには、その力量が問われる。方法論は労力と時間を節約するが、方法論に基づいた判読をするうちに目覚めてくる直観が大切なのである。以上のことは、テストの使用を急ぎすぎる人は特に、銘記しておかねばならない。（原著23頁）

「方法論に基づいた判読」とは、いわゆる指標に基づいて判別をしていくような読み方であろうが、それだけでは不十分であることを強調していることから、コッホにとっての診断が判別の結果に基づくものだけに収まらないプラス・アルファを含むものであることが伺われる。

こうしてみると、コッホにとって、「診断」という言葉は二種類の意味をもっていたように思われる。一つは、判別を目的とする診断であり、もう一つは直感によって全体を捉えるような診断である。ここでは仮に、前者を「判別診断」、後者を「全体診断」と呼んでおこう。「判別診断」と「全体診断」とは相対立するものではなく、「全体診断」は、その基礎に「判別診断」をもつという意味で、それを包含するより広い概念である。（これは、斎藤（2005）が述べる EBM と NBM の関係と同じである）。ユッカーは「人格全体を・・・漠然と察知する」ためには、「全体診断」が必要であると感じており、その姿勢がコッホにも受け継がれたのではないだろうか。

5 判別診断と全体診断

この後、「テスト状況」という節において、「診断」という言葉が三ヶ所で用いられている。

多くの診断的補助手段は、その意図がわからないので何か裏があるのではと、被験者が不信感を抱いてしまうが、バウムの場合はそれも無い。うまく描けないからと強くためられることもあるが、励ましの言葉をかけると描かれることも多い。（原著23頁）

真の価値は、他の診断法と一緒に用いることにある。その結果は単独でも価値あるものだが、他のテストの結果の意味内容に、いろいろな角度から光を当てることができるという点でも、貴重なのである。[バウムテストの場合] 比較的短時間にデータを集めることができ、他の方法の位置づけや結果も明確にしてくれる（と同時にその逆もまたいえるのだが）。まさにその事実が、[バウムテストの] 結果それ自身の価値について触れなくとも、診断的には貴重なものとなっているように思われる。（原著24頁）

前者は、コッホやユッカーがバウムテストを職業相談の場面で行っていたという事情を考慮しておかねばならない。つまり、職業相談の場面では、絵が描けるかどうかを参考にして職業を選ぶという流れの中で、心理テストとしてではなく、自然な形で導入ができることを述べているのである。後者では、他の診断法といっしょに用いることの価値が強調されている。

事物の根本にあるもの（Urding）としてのバウムは、それ自体、実り多いこと [Fruchtbarkeit（果実をたくさんつけること、転じて、多産、豊穡）] の象徴であるが、この自然崇拜と理解されるような象徴も、そもそもの最初から、十字象徴を含んでいる。それを診断図式との分岐点まで追及していくことも魅力的なことだが、それは、具体的なもの、感覚的なものを、一段高い秩序と結びつけたり、あるいは一段高いものを予感したりする限りにおいてのことである。こうして、魂の宇宙、魂の働く場が与えられる。近いものと遠いもの、小さいものと大きいものが、一つになって見え、外見上の矛盾も是認されているので、心理診断にちょうど適切な広さが与えられると同時に、重箱の隅をつつくような詮索からは守られている。（原著28ページ）

ここでは、バウムがそもそもの最初から十字象徴を含んでいることを述べた後で、それを「診断図式との分岐点まで追求していく」ことに慎重な姿勢を見せている。ここでの診断図式とは、上記の分類で言えば判別診断に当たるものであろう。「分岐点」と訳した Verastlung は、「枝分かれする」という意味で、十字象徴を診断図式として使うことを枝分かれとみている。逆にいえば、診断図式としての利用は、コッホの目指している「診断」の本幹ではないということになる。このことは、次に「診断」という言葉が用いられている以下の箇所で、さらに明確になる。

全体としてこの研究 [Stadeli の研究] は、中核兆候（幼年兆候）は、精神医学的な横断的診断 [鑑別診断] に何が重要であるかを、いわゆる指示兆候よりも、著しく神経症特異的に指摘することと同時に、バウムの粗雑な退行的構築障害は、縦断的診断 [発達の診断] の助けとなりうるということを示している。[実際には] これに反して、バウムテストだけを用いて、心の健康状態や単独の精神病理的状态像（神経症、精神病質、未熟性など）を満足のいく程度に分類することはできない。それゆえ、Stadeli の研究には少し先走りの部分がある。（原著45頁）

上記は、Hermann Stadeli の論文「医学心理学的なパイロット選抜の補助手段としてのコッホのバウムテスト、および類似の方法」に関するコッホの考えを総括する部分である。そこでコッホは、バウムテストが精神医学的な横断診断や発達の縦断診断の助けになることを認めつつも、バウムだけでは、心の健康状態や病的状態を分類することはできないと述べ、Stadeli の先走りを戒めている。つまりバウムテストを判別診断として使うことの限界を十分認識しており、バウムテストを判別診断に使うことを必ずしも目指していないことがわかる。

6 判別診断への躊躇

コッホは一方で指標の重要性を認識し、早期型と彼が名づけた指標を初めとして様々な指標が何を表わしているかについて考えを深めるために、発達の視点から調査を行い、統計結果について考察を行っている。その一方で、バウムテストを判別診断に使うことについては、極めて慎重な姿勢をとっている。たとえば、「診断的な目的のためには、最幼年の年齢で描かれたバウム描画の幼児的な表現型は、重要ではない」(原著50頁)と、幼児不定形を診断的な目的で利用することにブレーキをかけている。部分的な遅滞とされている指標を生物学的な意味での診断に用いることにも批判的な姿勢を示していることは次の部分から明らかである。「生物学的な考察方法は、実際の診断的な実務の直接的な要求に対して、わかりやすい形で用いられるので、拒みがたい利点を有している。にもかかわらず、この立場に対しては、C.G.Jungの次の批判を避けられない。「生物学的な前提を持って無意識に入り込むものは、衝動領域にはまり込んで立ち往生することになり、そこを超えて進めないだけでなく、絶えず身体的な存在領域に押し戻されてしまうだけである」・・・描画表現の中に早期型を指摘できるような多くの事例は、生物学的な観察方法でも理解できるだろう。それでも、これらの徴候を比較的簡単に誘発できるという事実は、体質的な変化を主張する生物学的な方法と矛盾する」。(原著95頁)。あるいは、「診断者が性格学的な思考の訓練を受けていなくて、表現そのものから学ぼうとしない場合、図的表現を図式的に観察するだけでは、明らかに危険である」(原著102頁)、「左/右の強調には、同時に、影の局在化、豊かにあるいは痩せた形に形作ること、瘤などが垣間見られ、鑑別診断に有用な指摘を与えることもできるが、もちろん必然性はなく、そうするならば、あまりにも図式的な態度である」(原著177頁)と述べて、指標のみに基づく図式的な理解の危険性についても、注意を促している。

さらに、催眠によって怒りを誘発した状況下で

得られたバウムについて分析がなされているが、怒りがどのような形で現れてくるかを考察したすぐ後で、怒りが同じ形で表現されるわけではないと釘をさすことも忘れていない。(上述の実験は、情動表現と情動状態の理解に対して手がかりを与えてくれる。情動的な興奮しやすさが、胆汁気質[激昂しやすい人]なら胆汁気質の、構成要素になっている部分に対して、そのような調査が有用な診断の手がかりを与えてくれるわけだが、激昂そのものが、同じような記述方法で表現されるはずだと主張しているわけではない[ことに注意されたい]) (原著102-103頁)。同じく、催眠下で得られたバウムを分析する中で、「明らかに、それぞれの描き手は、それぞれのやり方で「サディスト的」になっているが、徴候とその可能な解釈とを考慮するにしても、臨床的病像と結びつくような診断は避ける方がよいだろう。犯行につながるような要因を取り出すにしても、暫定的なものと心得ておくべきである」(原著114頁)と述べ、ここでは、バウムを判別診断に使うべきではないと主張しているようにすら思われる。少なくとも、原著を読む限りでは、バウムを判別診断に用いている例は原著のどこにも見当たらない。逆に判別診断に慎重であるべきことを繰り返し説いている。

7 分けることから重ねることへ

コッホが指標に基づく図式的な読みを重視していることは、「図式的な読みを学ばないものは、溺れてしまうことが避けられない。労苦を厭うならば、このテストからは手を引くべきである」(原著124頁)という強い言葉にもよく表れている。しかしながら、同時に「無心になされる把握に重い価値」も置いており、それは「優れた指標の記録にはすでに、解釈が半分含まれているからである。つまり、あちこちに見られる指標と解釈との類似性によって、自然と解釈が与えられる」と述べている。ここに、バウムに対する判別診断とは異なる姿勢が窺われる。コッホは「湾曲[／反り](Schweifung) = さ迷っている [／本筋から逸れている] (Schweifend)」(原著124頁)という例

を挙げている。ここでは Schweifung (枝が湾曲 [／反って] いること) が Schweifend (さ迷っている [／本筋から逸れている]) と言い換えられており、「反る」(そる)に「逸れる」(それる) という意味が重ねられている。あるいは、次の箇所では、枝が折れることと、内的な変化とが重ねられている。

それゆえ、枝が折れる [Astbruch] こと、それどころか、おそらく幹が折れることも、内的な変化の象徴となり、もはや、未完のもの、後退させられたもの、夢想的なものと同じではない。象徴は描き手の発達段階と年齢に応じてその意味を変える。それは診断学の助けになると同時に、困難なものにさせている。心の中には、実際に変化しないものなど一つもない。(原著183頁)

もう一つ例を挙げておこう。

描画の中で人目につく厚み [ふくらみ] を描いた湿疹患者が、初めて心理学に対する信頼を寄せたのは、「便秘」ではありませんか [Mann sei "verstopft". 直訳は、「詰まっていますか】という推論を述べた後であった。彼は大変な便秘だったが、20年間、誰もそのことについて尋ねた者はなく、その生徒は仮病を使っているとみなされてきたのである。正しく診断されたので、その患者は信頼を寄せ、その信頼を頼りに自ら深く掘り下げることになった。(原著138頁)

ここでは描画の中のふくらみを「詰まっていること」と記述し、それがそのまま、詰まっているという意味を持つ「便秘」と重ねられている。

ここでのキータームは「重ねる」である。判別診断においては診断は分類のために用いられる。つまり指標によって「分ける」ことが行われるが、コッホは「分ける」だけでなく「重ねる」ことも行っており、むしろ、こちらのほうに力を入れて

いるようにも思われる。

8 実際の事例におけるコッホの診断

最後のコッホが実際に事例の中で「診断」をどのように位置付けているかを見てみたい。ここでは紙数の関係もあり、事例 A を取り上げることにする。

あらゆる細分化 [部分的にみていくこと] から離れてバウム描画 [全体] に目を転じると、情動のバランスが取れていないことの影響がある、と診断者が述べることは可能で、ほとんど原初的ともいえる、突き動かす力 [／衝動的な力: Drangkraft] と突き出す力 (Stosskraft) の性質 (Natur) を見て取る (feststellen) ことができ、情動にはさまれて動きが取れなくなっていると診断するのはさほど困難なことではない。このような確認 (Feststellung) に基づいてのみ、更なる調査の方向とやり方を決めることができ、同時に、適性に関する助言に有益な基盤を見出すこともできるし、部下の上に立つリーダーとしての適性に有益な基盤を見出すこともできる。このことは、次のように簡潔な形で述べることができる。この男性は、三週間は勇敢に戦うが、日常的な些細な問題が生じるや否や、対決をやめて帰国する兵士のようなもので、そうなると、もはや、勢いよく力任せに衝突するようなことはしなくなる。ここでは情動性が持ち合わせていた洞察よりも強くなる。この男性は、思春期の時期に過激になる若者と同じように反応している。「未加工の [unverarbeitete: 文字通りには「仕事についていない」、はまり込んで立ち往生している思春期] という診断は悪くないように思われる。(原著221頁)

コッホは「情動に挟まれて動きが取れなくなっている」と診断している。これは、幹の中央部のふくらみの解釈に由来するものである。幹の先が細くなっているのに対し、幹の中央部が膨らんでおり、幹の中を根から先端に向かって流れるエネ

ルギーの動きを辿るなら、先端が細くなっているために「塞き止められ、はまり込んで立ち往生し、跳ね返されている」と記述される。さらに「幹の中央の目立つふくらみは、それを表現したものであり、はまり込んで立ち往生していること、詰まっていること、停滞状態、抑制されていることの表現、いわゆる抑圧〔Verdrängung、押しのけられていること〕の表現である」ということになる。これが何故「抑圧」の表現となるかは、Verdrängungという言葉の「押しのけられる」という意味（吉田，2004）に重ねられていることがわかれば理解可能となる。

このように幹の中を流れるエネルギーの動きを辿り、記述していくことで、自然な形で、幹の中央のふくらみが「情動に挟まれて動きが取れなくなっている」と解釈されるのである。言い方を変えれば、幹のふくらみに情動の流れが「重ねられている」のであり、これらは指標に基づく判別診断とは異なるものである。上記の引用の最後の部分の「unverarbeitete」という言葉にも、「未加工の」という意味と「仕事についていない」という意味とが重ねられているように思う。

このように、バウムの姿と描き手を重ねながら理解を深めていくことを行う一方で、判別診断に対しては、事例においても慎重な姿勢を崩していない。それは次のコッホの言葉によっても明らかである。これは「黒」という指標についての解説の中で統合失調症のバウムを紹介しているが、その事例に関連して述べている部分である。

統合失調の描画とすぐにわかるとされている「錯乱」という概念も、ここでは〔統合失調の指標・診断とすることが〕許されるように思われるかもしれないが、診断は非常に慎重になされねばならない。診断が知られていてバウム描画を問題とする場合は、当然、驚いた読者に見事に示すことなど意図も簡単にできる。描写の描画の中にわれわれが捉えるものは、病気そのものではない。とはいえ、それに対応するような指標の可能性は前もって否定してはならない。

たとえば統合失調者の描画に見られる徴候は、疾患そのものが多様であるのと同じように、非常に多様である。われわれの資料からは、統一された表現を推定させるようなものは証明されない。おそらく大概是、疾患に随伴する外観だけが表現されるように思われる。退行への思いはおそらく常に一緒に走っていて、そこから生まれてくる表現が暗く塗ることであるのだろう。（原著173頁）

ここでは、疾患に対応するような指標の可能性を前もって否定してはならないと述べる一方で、疾患そのものが多様であるのと同じように、統合失調者の描画に見られる指標も多様であり、一定の表現を推測させるようなものは証明されていない以上、判別診断には慎重でなければならないと述べている。

9 コッホにとっての心理診断とは見立てである

上記の考察から明らかになったように、コッホにとっての「診断」とは、判別診断ではなく、判別診断の基礎となる指標の解釈を十分に踏まえた上での「全体診断」であり、判別し分類することを目指すものではなく、「指標」と「解釈」と「人格イメージ」とを重ねることで理解を深めようとするものである。なお、ここでいう「解釈」とは、「優れた指標の記録にはすでに、解釈が半分含まれている」という意味での解釈であり、「あちこちに見られる指標と解釈との類似性によって、自然と与えられる」ものである。

現代の我が国の心理臨床における用語のうち、コッホにとっての診断を最も汲んでいる言葉を捜すなら、それは「見立て」ということになると思われる。アセスメントや診断という言葉には「判別診断」のニュアンスが前面に出てしまう。これに対し、「見立て」は本来、「対象を他のものになぞらえて表現すること」であり、まさにあるものを他のものと「重ねること」にはかならない。

「見立て」を精神療法・心理療法の用語として用いたのは土居健郎（1969, 1977）が最初である。

土居は診断という言葉に代わって、「見立て」（治療的診断）の重要性を強調する。診断が分類を目的とするものに対して、見立てという場合、「病気の種類ではなく、病気と診断される個々の患者の姿が浮かび上がってこないだろうか」と述べ、分類のための単なるレッテル貼りではなく、「患者の病状を正しく把握し、患者と環境の相互関係を理解し、どの程度まで病気が生活の支障となっているかを読み取ること」を目指す。土居は、「見立て」の特徴として、以下の4点をあげている。第一に、病歴の聴取、診察、検査、治療などが判然と区別して行われるのではなく、従ってその順序で進むのではなく、これらが渾然一体となって同時に進行するということである。（明確に判別する姿勢とは反対に位置する）。第二に、患者のどこまでがわかっていてどこがわからないかを区別することの重要性をあげている。第三に、治療者と患者の間の、関係性の重視。これは、バウムを客観的に外から眺めるだけではなく、じっくりと見つめ、その距離を縮めようとする姿勢に通じるものであろう。そして、第四に見立ての継続性である。すなわち、見立ててから治療が始まるのではなく、見立ての行為の中に治療が始まっており、治療が進んでいる間も見立ては絶えず繰り返されている。これも「当初はわからない部分をそのまま持ちつづけ、どう理解したらいいかという問いを、何日も、何週も、何ヶ月も、何年も、見え方の成熟過程がある地点に達するまで、問い続けていると、秘密に関わる何かが自然と姿をあらわしてくる」（原著23頁）というコッホの姿勢と重なる。

河合（1996）はさらにこれを展開して、浮世絵の見立てを例に心理臨床における見立てを論じている。「見立て」という趣向が最初に流行したのは俳諧の世界であった。そこでは、前句の内容を別なものに解釈しかえて句をつける付合（つけあい）という意味（広辞苑）であった。それが江戸時代になると独特の意味を持つようになり、浮世絵などの領域に拡大されていったという。河合が早川の論文から引用している鈴木春信の「風流坐

鋪八景」は、中国伝来の伝統的な山水画「瀟湘八景」の「見立て」である。中国の瀟湘とは「湖南省の洞庭湖の南辺、瀟水と湘水とが合流する地域の称で、古来景勝の地として名を有し、多くの文人墨客が訪れてその景を詩画の主題とした」場所である。たとえば「瀟湘八景」の第五図「漁村夕照」では、漁村の夕照の景色が見事に描かれているが、春信の「風流坐鋪八景」の第五図「行灯夕照」では、「階段下の小部屋で亭主が浮気の実真中。そこへ行灯を手に女房がまさに踏み込んだ扱。女房は岩田帯を締めてゐるから妊娠中と判る。とすると、亭主の浮気の相手は手伝いの娘でもあろうか」という図になっている。中国古来の景勝の地の夕照の風景を、亭主が浮気をしているところに女房が踏み込んだ場面を描いた春画に「見立て」しているのである。本稿の文脈で言うならば、まさに、二つの絵が「重ねられて」いるということになる。この二つの絵がどうして重なるのだろうか。

早川は『「行灯」を『夕照』に見立てる趣向は表の見立てに過ぎない』と言い、裏の見立ては、太陽が沈むにしたがって辺りは暗くなり家々の灯火が目につくようになる。夕暮れにおいて光源が交代する。そこで「沈んでいく『夕日』を妊娠中の妻に、家々の小さな『灯火』を手伝いの娘に見立てて、いつしか光源が交代してしまう『夕照』の情景を、妻の妊娠中をいいことに、つい身近な娘に気を移してしまった亭主の浮気心に見立てた」のである。「風流坐鋪八景」を「瀟湘八景」に見立てる場合、見立てるもの（「風流坐鋪八景」）と見立てられるもの（「瀟湘八景」）との間に「夕照」と「行灯」、あるいは光源の交代といった類似点はあるものの、それ以外はかなりかけ離れていることが、単なる比喩とは異なる。見立てるものと見立てられるもの間にある類似点以外はかなりかけ離れていることが、「見立て」の特徴の一つである。それゆえ、既存の診断体系に当てはめる場合とは異なって、見立てには想像力が要求される。

河合は、これを臨床場面に引き戻して、亭主の浮気の現場を見た女性がヒステリー症状を呈して

来談した場合を考えている。これを「ヒステリー」と診断するのは容易である。しかし、亭主の浮気を発見してヒステリー症状を呈している女性の姿に「瀟湘八景」の「漁村夕照」を見立てるに近いことを行えるようになることが、臨床場面では要求されると河合は言う。そして、真の「見立て」を行うためには、「見立てるもの」(現存の具象、この場合「風流坐鋪八景」)の中に、「見立てられるもの」(価値、この場合「瀟湘八景」)を「実感を伴って見る」ことが必要である。

コッホにとってのバウムも、まさにそのようなものだったのではないだろうか。バウムを見ながらそこに描き手の姿を重ねていく。「木の姿」を「描き手の姿」に見立てることにより、描き手を理解していく。しかし、河合も述べるように、臨床において「実感を伴う見立て」をするためには、治療者と患者の間に深い関係が存在していなくてはならない。しかもその場合、一方向的な、つまり治療者が患者のことを見立てるような関係だけではなく、「相互見立て」の関係にあることを認識しておく必要がある。コッホがバウムをじっくりと見つめ、バウムとの距離を縮めていくことの必要性を強調したのも、描かれたバウムとの深い関係を抜きにバウムを理解することなどできないと感じていたからではないだろうか。したがって、コッホの『バウムテスト第三版』の副題、Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel は、「心理的見立ての補助手段としてのバウム描画の研究」と訳すのが最もコッホの真意を汲むことになるのではないだろうか。

<付記>

本研究は科学研究費(基盤研究C(2):課題番号17530504)による研究成果の一部をまとめたものである。

文献

- 土居健郎(1969):「見立て」について. 精神医学11(12), 2-3.
土居健郎(1977):方法としての面接. 医学書院.

(土居健郎(2000)土居健郎選集5, 人間理解の方法. 岩波書店.)

Izutsu, T. (1959): The Structure of the Ethical Terms in the Koran. Keio University Press.

井筒俊彦(1972):意味の構造. 新泉社.

井筒俊彦(1992):意味の構造. 井筒俊彦著作集4. 中央公論社.

(これは井筒(1972)を収めたものだが、著作集に収めるにあたり、その間に著者自身が大きく展開させた「深層意味論」の成果を取り入れて、著者は序章から第4章までを書き改めている。)

河合隼雄(1996):日本文化における「見立て」と心理療法. 精神療法22(2), 125-127.

岸本寛史(2005):『バウムテスト第三版』におけるコッホの精神. 山中康裕他編, バウムの心理臨床. 創元社

Koch, K. (1949): Der Baumtest. Hans Huber. 林勝造ら訳(1970):バウム・テスト. 日本文化科学社.

Koch, K. (1957): Der Baumtest. 3.Aufl. Hans Huber.

牧野信也(1972):解説. 井筒俊彦(1972)意味の構造. 新泉社.

斎藤清二(2005):ナラティブ・ベイスト・メディスン(NBM). 日本醫事新報4246, 22-27.

吉田 稔(2004):Freudの言葉を考え直す. 心理臨床学研究, 22(4), 358-369.